



THE CZECH
PHILHARMONIC ORCH.



磨きぬかれた響き、歴史と伝統の名門オーケストラ

チェコ・フィルハーモニー管弦楽団

ノイマン／コシユラー／フフロ／スターン



ほのかに伝わってきた土のかおり。それは田舎くささではなく、むしろ都会のにおい。きっとその土地をふみしめて生きる人々のおいなのだろう。そして古くからつかわれてきた伝統のかおりなのだろう。なぜか、アスファルト・ジャングルからは消え去ってしまったように思う。

あの名門オーケストラ、チェコ・フィルハーモニー管弦楽団が、ヴァツラフ・ノイマンを首席指揮者に戴き、チェコスロヴァキアを代表する指揮者のスデニェツク・コシユラーとともに、ヴァイオリンの巨人アイザック・スターンとチェロの名手ヨゼフ・フフロを迎えて、ふたたび来日して、ドヴォルザーク、スメタナを中心に、味わいぶかい御馳走をふるまってくれた。ちなみに、今年は、スメタナの生誕百五十年にあたる。

磨きぬかれた響きはあくまでもつややかであり、ガサついたわれわれをうるおしてくれた。またその音たちは、かれらを滋養する実り豊かな祖国を讃えているかのようであった。

CONCERTS REVIEW

6月の音楽会批評



執筆者	上野 晃	宇野功芳	河塚順一郎	日下部吉彦
	小石忠男	中河原理	中村洪介	西村弘治
	長谷川武久	樋口良健	藤田由之	

9th Min-on Music Competition
Competition for Chamber Ensembles "1"

第9回 民音コンクール 《室内楽》



●期日 予選: 49年11月22日(金)
本選: 49年12月2日(月)
●会場 日本都市センター・ホール

●受付期間/49年10月1日(火)~
10月31日(木)
●申込み先/民音コンクール
実行委員会

●主催/財団法人・民主音楽協会
●協賛/ルフトハンザ・ドイツ航空
●審査員/巖本真理・海野義雄・
江藤俊哉・黒沼俊夫・斎藤秀雄・
柴田尚雄・湯山一行・森正・
安川加寿子・吉田雅夫 他(50音順)

●予選・本選ともに一般公開。
入場整理券はハガキに
入場整理券はハガキに
住所・氏名・年齢・職業
(学生は学校名)を記入のうえ、
お申込み下さい。(先着順)

〒160東京都新宿区北新宿1-32-13
Tel.03(371)5101(代)

民音

チェコ・フィルの東京公演二日目を聴く。プロクラーはスメタナの交響詩《モルダウ》、ベートリウスのヴァイオリン協奏曲（独奏アイザック・スターン）、ドヴォルザークの《新世界より》。指揮者は首席のヴァツラフ・ノイマンである。

チェコで最近のノイマン・リチャード・フィルを聴いて帰ってきた人たちが口をそろえて絶讃するので、期待して出かけたのだが、結果はまさに平凡であった。まずオーケストラの状態が良くない。弦は特別に悪くはないが、そうかといって耳をそば立てるほどのものを持ち合せず、管は明らかに不調である。わけでも木管はヴァイブラートのせいもあって、ハーモニイが汚い。

ノイマンの指揮はすいぶん昔と違ってきたようだ。地味すぎるくらい地味だった彼が、かなり表情を濃くつけるようになった。それはそれで良いのだが、問題は何となく中途半端で、ふつ切れないことであらう。《モルダウ》の冒頭、テンポが落着かないせいもあったが、フルートの受渡しで下手で興ざめた。しかし、急流の部分はティンパニの強打が取つてつたようである。しらくることおびただしい。これに比べると《新世界より》はずっとよくなったが、この方は個性味が無さすぎる。

結局、当夜の聴きものはスターンのヴァイオリンであった。何よりも音楽が真摯であり、しかも細部まで完全に練り上げられている。音の美しさは無類で、絶えず微妙に変化し、外面的に陥らず、この大曲をじくく味あひ深く弾き通す実力は、まことに大家の品格であった。6月12日・NHKホール 《宇野功芳》

読書、今月の客演指揮者はラファエル・フリーベック・デ・アルゴスである。一九三三年、スペインの古都アルゴスに生まれ、現在はマリッド国立音楽団の音楽監督兼常任指揮者をつとめる。たまた、ヨーロッパ各地をまわって、きわめて情熱的な指揮者として人々を集めている。

確かにアルゴスの演奏は、情熱的。しかし、当夜の読書は技術的欠陥が目立ち、指揮者の意図を十分に表現してはいたとは言えない。弦はききすぎて美感を欠き、管はミスが多く、かなりハラハラさせられた。はくはオーケストラに限らず、テクニクはあまり気にならない方なのだが、そのほうが辟易したのだから、相当なものだつたのだらう。逆に言えば、アルゴスの表現に内容が乏しく、オーケストラの技術を超えられなかったのである。

最初のベートリウスの第八は第三章までがまずまずでよかったが、フィナーレはいただけない。テンポを自在に動かすのは良いのだが、それが心理的に何の効果もあげられなかったのは、アルゴスの表現力の限界であらう。

次のストラヴィンスキーの《ペトルーシュカ》（一九四七年版）は、当夜の中では良い方で、デリカシーと詩情は案にしたくもなかったが、オーケストラは大したものだ。最後はラウエルの《ボレロ》で、冒頭のディミッシェモから著しく広がり、いやが上にも聴衆を圧倒しようとする解釈である。しかし、最後は、これでもかこれでもかと押寄せた最強音は、音楽というよりは、スボットと呼んだ方が当っているのではないだろうか。6月19日・東京文化会館（大） 《宇野功芳》

世界のいろいろなオーケストラを耳にしていると、小沢征爾の指揮する新日本フィルは日本にしかないものの特色をおもひ鮮やかに印象づける。今度はシェンベルクの《浄夜》が日本画になつて現れたかのように私を驚かせた。その弦楽合奏の爽やかな響きは初めから終りまで詩的な情感にゆめいいて実に繊細なニュアンスの移り変わりを映し出していた。ヴァイオリンの艶やかさやコントラバスの深きうくぶん欠き、本来の濃厚な油絵のようなトーンは影をうつくしたが、そのかわり高度な合奏の技術と清潔な色彩感覚によつて精緻物のような《浄夜》がくりひろげられた。デーメル詩のよびおこす胸のむかつく官能的な響きではなく、そこに私は衣すれの音をきいたといつてもいい。後期ロマン派の類型的な語法が直接にうつつてくるのとちがって、遠くからささやくように伝つてきた、そんな衣すれの音に匂うような色気を感じたものだ。

小沢の指揮する新日本フィルはストラヴィンスキーの《火の鳥》（一九二〇年版の組曲）においても先の印象を弱めはしなかった。うまい管楽器のソロで鮮やかな色彩感を築いたが、それも油きつたものではなかった。全オーケストラが鳴つてくるときでも爽やかなのだ。こうした種類の華麗な感覚は小沢の個性を形成している本質的なものであることはますます明かされていく。確かめられたけれども、それが依然として類型化してないのはすばらしい。《火の鳥》はますますいい音にまがえてきて耳を洗つたのだ。もし比較してよければ、同じころマゼルのクリウランド管弦楽団を指揮したピョートルエフの《ロミオとジュリエット組曲》は濁りある響きで楽しめた。小沢の指揮する新日本フィルは世界に出ても恥かしくない。6月13日・東京文化会館 《西村弘治》

新日フィル=小沢



N響=岩城



NHK交響楽団第六三・六三三・六三六回定期公演

今シーズンのNHK交響楽団は、去る二月についてこの六月にも、三つの定期演奏会で計四曲（これにアンコールの一曲が加わる）の日本の管弦楽作品をとりあげた。これは昨年、N響事務局の現代作品に関する浅薄な見解で、作曲家たちとのあいだに生じたトラブルに対して、一つの実質的な回答と受けとれる姿勢は、はじめて示されたことになる。日本作品のなかの二月の例とはかなり趣が異なる。日本作品のなかの一つは、第二次世界大戦前のおそれられし旧作の発掘、復活を意図してあり、アンコールに用意されたのが、外山雄三の日本の有名な民謡によるエンターテインメント（「ラブソング」）であった。また日本の作品のほかに、ドヴォルザークの《新世界交響曲》やチャイコフスキーの《第五交響曲》といったベテラン・ナインが選ばれているものも、もちろん指揮者岩城宏之の意図を含んだ上、ある種のポリシーを配慮した態度の表明と見られる。

さて、今次の日本作品のなかでまづきに報告しておきたいのは、新人といつてよい平義久の《オーケストラのためのクロモフォニイ》である。東京芸術大学作曲家で池内友太郎に学んだと、一九六六年にフランス（留学）パリ音楽院でジョリウエやメシアンに師事、卒業後ずっとフランスにとどまり、パリの前衛的作曲陣と接触を続けながら、しだいに独自の作曲スタイルをあらわし、最近フランスで注目されてきた三十歳代なかばのこの作曲家は、生国日本でまづたく知られていない。すでにオーケストラ作品二つを含む十数曲の作品のことが、パリで楽譜出版されているが、国内では無名の平のこれはデビューにあたる。

その近作《クロモフォニイ》に聴いたのは、まがいなく日本人らしい繊細な感性を秘め、静かに微妙に移り変わっていく音色の、日本の四季の色彩の変化にまたえられる美しさである。それは武満徹の音楽にもつづじるところをもっているが、七つの狐のような部分からなる二十分近いその悠揚たる流れと不思議な

透明感、昨今の日本の作曲には見られない美点となつて、私を魅了した。

石井真木が昨年ベルリンで発表した新作《ディボール》も、やはり日本で初披露の作品。この作曲家が自在にする音境の巨大なエネルギーは、ここでもいふところに見られるが、冒頭のアルト・フルートの独奏に象徴されるような、対極をなす東洋的な柔らかない触が、これまでの石井作品にあまり聴かれなかった新しい局面をおし開こうとしている。しかしまだ、戸惑われずにはおられない、変質しきれないという何かや説得力の不足が残り残っているように思われる。

広瀬重平の《悲》（トリステ）と題されたチェロ協奏曲は、チェリスト岩崎流のレコード録音のために作曲され、すでにレコードで聴かれ、ステージ演奏もされているが、多数の打楽器を含むやや変則編成の小オーケストラと独奏チェロのための新しい形の協奏曲作品。今回の場子介のソロは、岩崎のドラマティックなそれにくらべて、部分部分で感度の高い新鮮な発露やあらたな発見をもたらせてくれたが、イメージの持続に弱かった。

深井史郎の《パロディ的な四楽章》は、一九三〇年代の日本の管弦楽作品のなかで異色のものだらう。ダイナミックな色彩の構図と刺激的なリズムを備えている。だが、演奏には不満がすくなくあった。オーケストラのパラメータがどうもぐあい悪い。もつと均整が計られつつ、そのなかで鮮かな移り身とでもいうような変貌と風刺が意味づけられることを期待していたのだが。